

マトリックスの Affin 標示及びその理論

(構造力学に応用せる行列の性質について)

准員 島田 静 雄*

要旨 高次の不静定構造物の解を得るには、多くの未知数を含む連立一次方程式を解く事に帰する。本文は、行列の演算をベクトル解析により展開し、構造力学における諸問題に1つの見方を与えるものである。

1. 定義並びに記号

n 箇の数値 $a_1, a_2, a_3, \dots, a_n$ を1組の数の集合と考え、これを n 次元のベクトルと呼び $a_1, a_2, a_3, \dots, a_n$ の数値をベクトルの成分とする。

$$\mathbf{A} \equiv \{a_1, a_2, a_3, \dots, a_n\} \equiv \{a_k\} \dots \dots \dots (1)$$

幾つかのベクトルを区別するには、次の記法に従う。

$$\begin{aligned} \mathbf{A}_1 &\equiv \{a_{11}, a_{12}, a_{13}, \dots, a_{1n}\} \equiv \{a_{1k}\}, & \mathbf{A}_2 &\equiv \{a_{21}, a_{22}, a_{23}, \dots, a_{2n}\} \equiv \{a_{2k}\} \\ \dots &\dots \dots, & \mathbf{A}_i &\equiv \{a_{i1}, a_{i2}, a_{i3}, \dots, a_{in}\} \equiv \{a_{ik}\} \\ \mathbf{B} &\equiv \{b_1, b_2, b_3, \dots, b_n\} \equiv \{b_k\}, & \mathbf{C} &\equiv \{c_1, c_2, c_3, \dots, c_n\} \equiv \{c_k\} \end{aligned}$$

特に漸らな限りベクトルの次元は常に n ($n =$ 正の整数) とする。 n が2ないし3であれば、平面幾何学及び立体幾何学のベクトルの定義はそのまゝ適用できて、ベクトルは空間に規定された方向と大きさを持つ線分と考えることができる。 n が4以上の大きさになれば、常識的な理解は通用しなくなる。ベクトルの定義は4次元以上の空間を想像して、その空間に規定された方向と大きさを持つた線分と考えて良い。広義に解釈された n 次元の空間を Affin 空間と呼ぶ。構造力学の問題に、2次又は3次の不静定構造物を取扱うことがあるが、この場合の不静定次数は必ずしも常識的な幾何空間と対応するものではない。この論において定義するベクトルは、数学的な演算こそ2次元のユークリッド線形空間に対応するものとは云え、線分と云う意味よりも1組の数の集合を与える量として理解する必要がある。

2つのベクトル \mathbf{A} 、及び \mathbf{B} の和、差、積は次に規定する演算以外のものを含まない。

$$\left. \begin{aligned} \mathbf{A} \pm \mathbf{B} &\equiv \{a_1 \pm b_1, a_2 \pm b_2, a_3 \pm b_3, \dots, a_n \pm b_n\} \\ (\mathbf{A} \cdot \mathbf{B}) &= a_1 \cdot b_1 + a_2 \cdot b_2 + a_3 \cdot b_3 + \dots + a_n \cdot b_n \\ \varphi \cdot \mathbf{A} &\equiv \{\varphi a_1, \varphi a_2, \varphi a_3, \dots, \varphi a_n\} \end{aligned} \right\} \dots \dots \dots (2)$$

ただし、 φ はスカラー

3次のベクトルの積の定義にはスカラー積とベクトル積の2種があるが、 n 次のベクトルにベクトル積に対応するものはない。従つて n の任意の正の整数に対して定義できるスカラー積のみを二つのベクトルの積と考える。

2つのベクトル \mathbf{A}, \mathbf{B} の積が0であれば、このベクトルは互いに直交すると云う。 n 次元の Affin 空間には、互いに直交する n 箇のベクトル $\mathbf{A}_1, \mathbf{A}_2, \mathbf{A}_3, \dots, \mathbf{A}_n$ が存在し得る。

総べては0でない n 箇のスカラー $k_1, k_2, k_3, \dots, k_n$ があつて、 n 箇のベクトル $\mathbf{A}_1, \mathbf{A}_2, \mathbf{A}_3, \dots, \mathbf{A}_n$ に関して下式の成立する時、 n 箇のベクトルは互いに1次独立であるといひ、しからざる時を互いに1次従属であると云う。

$$k_1 \cdot \mathbf{A}_1 + k_2 \cdot \mathbf{A}_2 + k_3 \cdot \mathbf{A}_3 + \dots + k_n \cdot \mathbf{A}_n \neq 0$$

1次従属であれば n 箇のベクトルの何れにも直交するベクトルが必ず存在する。

n 次元の Affin 空間で n 箇の単位ベクトルを次のように定義する。

$$\left. \begin{aligned} \mathbf{E}_1 &\equiv \{1, 0, 0, \dots, 0\}, & \mathbf{E}_2 &\equiv \{0, 1, 0, \dots, 0\}, & \mathbf{E}_3 &= \{0, 0, 1, \dots, 0\} \\ \dots &\dots \dots, & \mathbf{E}_n &\equiv \{0, 0, 0, \dots, 1\} \end{aligned} \right\} \dots \dots \dots (3)$$

2つのベクトル \mathbf{A}, \mathbf{B} の成分 $a_1, \dots, a_n, b_1, \dots, b_n$ の積で得られる n^2 箇の数値の集合を次の行列で表わしこれを (Affinor) アフィノールと定義する。

$$\{\mathbf{A} \times \mathbf{B}\} \equiv \begin{pmatrix} a_1 b_1 & a_1 b_2 & a_1 b_3 & \dots & a_1 b_n \\ a_2 b_1 & a_2 b_2 & a_2 b_3 & \dots & a_2 b_n \\ a_3 b_1 & a_3 b_2 & a_3 b_3 & \dots & a_3 b_n \\ \dots & \dots & \dots & \dots & \dots \\ a_n b_1 & a_n b_2 & a_n b_3 & \dots & a_n b_n \end{pmatrix} \dots \dots \dots (4)$$

* 東京大学大学院学生、工学部土木教室

アフィノールの定義を2つのベクトルの積の1種として与えた例を見るが¹⁾、この論で定義するアフィノールと本質的には異なるものではない。著者はマトリックスの演算に数値を与える具体的に計算する必要上2つのベクトルの積を上式のように定義することの簡便さと実用性を見だし、これをアフィノールと名づけたものなのである。

アフィノールは、それ自身では意味を持ち得ない数量である。行列として見れば、そのデターミナントは常に0である。アフィノールの重要な働きは、行列の変換に際して媒介的な作用を持ち、種々の興味ある演算を誘導できることにある。具体的な応用例は、そのつど詳しくのべることとし、演算の法則を簡単に示す。

アフィノールの定義から明かなように、 $\{A \times B\}$ と $\{B \times A\}$ とは一般に等しくない。両者が等しくなるのは、 $B \equiv kA$ を満たすようなスカラー k の存在する時に限る。

$$\{A \times (B_1 + B_2)\} \equiv \{A \times B_1\} + \{A \times B_2\}, \{k \cdot A \times B\} \equiv \{A \times k \cdot B\} \equiv k\{A \times B\} \dots \dots \dots (5)$$

アフィノールとベクトルとの積はベクトルである。

$$\{A \times B\} \times C \equiv (B \cdot C) \cdot A, A \times \{B \times C\} \equiv (A \cdot B) \cdot C \dots \dots \dots (6)$$

アフィノールとアフィノールとの積はアフィノールである。

$$\{A \times B\} \times \{C \times D\} \equiv (B \cdot C) \cdot \{A \times D\}, \{C \times D\} \times \{A \times B\} \equiv (D \cdot A) \cdot \{C \times B\} \dots \dots \dots (7)$$

アフィノールの積の演算は総べて行列の演算の法則に従う²⁾。

アフィノールとベクトルの積で得られるベクトルと、他のベクトルとの積で得られるスカラーを2つのアフィノールのスカラー積と定義する。

$$\begin{aligned} \{A \times B\} : \{C \times D\} &= \{C \times D\} : \{A \times B\} = [\{A \times B\} \times C] \cdot D \\ &= [\{C \times D\} \times A] \cdot B = (A \cdot D) \cdot (B \cdot C) \dots \dots \dots (8) \end{aligned}$$

単位ベクトル $E_i (i=1, 2, 3, \dots, n)$ で作られるアフィノールを特に単位アフィノール $\{E_i \times E_j\}$ と呼ぶ。 i 並びに j の指数は各々 $1 \dots n$ までであるから、結局単位アフィノールの種類は n^2 箇存在する。

2つ以上のアフィノールの和並びに差は行列の演算の法則に従う。そしてこれはもはやマトリックスである。

n 箇のベクトル $A_1, A_2, A_3, \dots, A_n$ の集合を表わす数学量を、マトリックス $\{A\}$ と呼び下式で示す。

$$\{A\} \equiv \begin{pmatrix} a_{11} & a_{12} & a_{13} & \dots & a_{1n} \\ a_{21} & a_{22} & a_{23} & \dots & a_{2n} \\ a_{31} & a_{32} & a_{33} & \dots & a_{3n} \\ \dots & \dots & \dots & \dots & \dots \\ a_{n1} & a_{n2} & a_{n3} & \dots & a_{nn} \end{pmatrix} \equiv \begin{pmatrix} A_1 \\ A_2 \\ A_3 \\ \dots \\ A_n \end{pmatrix} \equiv \{a_{ik}\} \dots \dots \dots (9)$$

マトリックスの或る1つの行を成分とするベクトルを行ベクトル $A_i \equiv [a_{i1}, a_{i2}, a_{i3}, \dots, a_{in}]$ とし、或る1つの列を成分とするベクトルを列ベクトル $A_k^* \equiv [a_{1k}, a_{2k}, a_{3k}, \dots, a_{nk}]$ と定義する。同じ上のマトリックスを列ベクトル A_k^* で表わせば、

$$\{A\} \equiv \{A_1^*, A_2^*, A_3^*, \dots, A_n^*\} \dots \dots \dots (10)$$

マトリックス $\{A\}$ の成分 a_{ik} の行と列とを入れ替えた行列を転置行列 $\{A^*\}$ と記す。すなわち、

$$\{A^*\} \equiv \begin{pmatrix} A_1 \\ A_2 \\ A_3 \\ \dots \\ A_n \end{pmatrix} \equiv [A_1^*, A_2^*, A_3^*, \dots, A_n^*], \{A^*\} \equiv \begin{pmatrix} A_1^* \\ A_2^* \\ A_3^* \\ \dots \\ A_n^* \end{pmatrix} \equiv [A_1, A_2, A_3, \dots, A_n] \dots \dots (11)$$

$A_i \equiv A_i^*$ なるマトリックスを対称行列 (Symmetric matrix), $A_i \equiv -A_i^*$ なる時、交代行列 (Skew symmetric matrix) と呼ぶこともある³⁾。マトリックスの記号の書き方は種々あるが、演算の法則を尊重し、記法を簡略にするために、成分 a_{ik} で表わすよりもベクトルの成分で示すのを簡便とする。

2つのマトリックス $\{A\}$ と $\{B\}$ との和と差は、

$$\begin{aligned} \{A\} \pm \{B\} &\equiv \{A \pm B\} \equiv [A_1^* \pm B_1^*, A_2^* \pm B_2^*, A_3^* \pm B_3^*, \dots, A_n^* \pm B_n^*] \\ &\equiv \begin{pmatrix} A_1 \pm B_1 \\ A_2 \pm B_2 \\ A_3 \pm B_3 \\ \dots \\ A_n \pm B_n \end{pmatrix} \dots \dots \dots (12) \end{aligned}$$

ベクトルとマトリックスとの積はベクトルである。

$$\left. \begin{aligned} \{A\} \times B &\equiv \{(A_1 \cdot B), (A_2 \cdot B), (A_3 \cdot B), \dots, (A_n \cdot B)\} \\ B \times \{A\} &\equiv \{(A_1^* \cdot B), (A_2^* \cdot B), (A_3^* \cdot B), \dots, (A_n^* \cdot B)\} \end{aligned} \right\} \dots\dots\dots (13)$$

今、上式の積で得られるベクトルを、 $V_1 \equiv \{A\} \times B$ 及び $V_2 \equiv B \times \{A\}$ とおけば、マトリックスとアフィノールとの積の演算を次のように表わすことになる。

$$\{A\} \times \{B \times C\} \equiv \{V_1 \times C\}, \quad \{C \times B\} \times \{A\} \equiv \{C \times V_2\} \dots\dots\dots (14)$$

マトリックスとマトリックスとの積はマトリックスを作る。

$$\begin{aligned} \{A\} \times \{B\} &\equiv \begin{pmatrix} A_1 \\ A_2 \\ A_3 \\ \dots \\ A_n \end{pmatrix} \times \{B_1^*, B_2^*, B_3^*, \dots, B_n^*\} \\ &\equiv \begin{pmatrix} (A_1 \cdot B_1^*) & (A_1 \cdot B_2^*) & (A_1 \cdot B_3^*) & \dots & (A_1 \cdot B_n^*) \\ (A_2 \cdot B_1^*) & (A_2 \cdot B_2^*) & (A_2 \cdot B_3^*) & \dots & (A_2 \cdot B_n^*) \\ (A_3 \cdot B_1^*) & (A_3 \cdot B_2^*) & (A_3 \cdot B_3^*) & \dots & (A_3 \cdot B_n^*) \\ \dots & \dots & \dots & \dots & \dots \\ (A_n \cdot B_1^*) & (A_n \cdot B_2^*) & (A_n \cdot B_3^*) & \dots & (A_n \cdot B_n^*) \end{pmatrix} \dots\dots\dots (15) \end{aligned}$$

対角線の成分が総べて1で、他の成分が0であるものを単位マトリックスと呼び、次式で示す。

$$\{E\} \equiv \begin{pmatrix} 1 & 0 & 0 & \dots & 0 \\ 0 & 1 & 0 & \dots & 0 \\ 0 & 0 & 1 & \dots & 0 \\ \dots & \dots & \dots & \dots & \dots \\ 0 & 0 & 0 & \dots & 1 \end{pmatrix} \equiv \begin{pmatrix} E_1 \\ E_2 \\ E_3 \\ \dots \\ E_n \end{pmatrix} \equiv \{E_1, E_2, E_3, \dots, E_n\} \dots\dots\dots (16)$$

或る2つのマトリックスの積が単位マトリックスになる時、これらは互いに他の逆マトリックスであると云う。(15) 式のマトリックスの積が単位マトリックスになるには成分ベクトルに

$$A_i \cdot B_j^* = \delta_{ij} \begin{cases} = 0 & i \neq j \\ = 1 & i = j \end{cases} \dots\dots\dots (17)$$

の関係がある。特に $A_i \cdot B_j^* = \delta_{ij}$ である時、 B_j^* のベクトルを A_i に対する逆ベクトル A_i^{-1} の記法を使う。マトリックス $\{A\}$ に対する逆マトリックスは

$$\{A^{-1}\} \equiv \{A_1^{-1}, A_2^{-1}, A_3^{-1}, \dots, A_n^{-1}\}, \quad A_i \cdot A_j^{-1} = \delta_{ij} \dots\dots\dots (18)$$

最後にマトリックスとアフィノールとのスカラー積を定義しておく。(14) 式のマトリックスとアフィノールとの積の記法を使用して

$$\{A\} : \{B \times C\} = (V_1 \cdot C), \quad \{C \times B\} : \{A\} = (V_2 \cdot C) \dots\dots\dots (19)$$

以上で、ベクトル、アフィノール、マトリックス相互の関係を簡潔に述べ、演算の法則を定義した。紙数の都合上、詳細を聞き難いが、応用を工学問題に限定させるために用語並びに記号を著者自身の独断で定義したものが多。その点種々の論議が純数学問題として提出されるであろうし、数々の批判も寄せられるであろう。

2. マトリックスのアフィノールに依る標示

任意の1次独立な n 箇のベクトルを $A_1, A_2, A_3, \dots, A_n$ とする。或るマトリックス $\{M\} \equiv \{m_{ik}\}$ が、 $\{A_i \times A_j\}$ のアフィノールに依つて下式のように表わされたものとする。

$$\{M\} \equiv \begin{pmatrix} b_{11}\{A_1 \times A_1\} + b_{12}\{A_1 \times A_2\} + b_{13}\{A_1 \times A_3\} + \dots + b_{1n}\{A_1 \times A_n\} \\ + b_{21}\{A_2 \times A_1\} + b_{22}\{A_2 \times A_2\} + b_{23}\{A_2 \times A_3\} + \dots + b_{2n}\{A_2 \times A_n\} \\ + b_{31}\{A_3 \times A_1\} + b_{32}\{A_3 \times A_2\} + b_{33}\{A_3 \times A_3\} + \dots + b_{3n}\{A_3 \times A_n\} \\ \dots \\ + b_{n1}\{A_n \times A_1\} + b_{n2}\{A_n \times A_2\} + b_{n3}\{A_n \times A_3\} + \dots + b_{nn}\{A_n \times A_n\} \end{pmatrix} \dots\dots (20)$$

マトリックスが、上式のように有限個のアフィノールの1次形式で与えられる時、これをマトリックスのアフィノールに依る展開と名づける。展開の方法は、ベクトルの選択の如何によつて各様に表示得るものであり、例えば(9)式のマトリックスは、

$$A_1 \equiv [1, 2], \quad A_1^{-1} \equiv \left\{ -2, -\frac{3}{2} \right\}, \quad A_2 \equiv [3, 4], \quad A_2^{-1} \equiv [1, -1/2]$$

A_1^{-1}, A_2^{-1} で得られる4通りのアフィノールは

$$\begin{aligned} \{A_1^{-1} \times A_1^{-1}\} &\equiv \begin{bmatrix} (-2) \times (-2), & (-2) \times (3/2) \\ (3/2) \times (-2), & (3/2) \times (3/2) \end{bmatrix} \equiv \frac{1}{4} \begin{bmatrix} 16, & -12 \\ -12, & 9 \end{bmatrix} \\ \{A_1^{-1} \times A_2^{-1}\} &\equiv \begin{bmatrix} (-1) \times 1, & (-2) \times (-1/2) \\ (3/2) \times 1, & (3/2) \times (-1/2) \end{bmatrix} \equiv \frac{1}{4} \begin{bmatrix} -8, & 4 \\ 6, & -3 \end{bmatrix} \\ \{A_2^{-1} \times A_1^{-1}\} &\equiv \begin{bmatrix} 1 \times (-2), & 1 \times (3/2) \\ (-1/2) \times (-2), & (-1/2) \times (3/2) \end{bmatrix} \equiv \frac{1}{4} \begin{bmatrix} -8 & 6 \\ 4 & -3 \end{bmatrix} \\ \{A_2^{-1} \times A_2^{-1}\} &\equiv \begin{bmatrix} 1 \times 1, & (-1/2) \times 1 \\ 1 \times (-1/2), & (-1/2) \times (-1/2) \end{bmatrix} \equiv \frac{1}{4} \begin{bmatrix} 4, & -2 \\ -2, & 1 \end{bmatrix} \end{aligned}$$

(20) 式に依つて展開するための b_{ik} の数値は (22) 式で示される。

$$\begin{aligned} \{\{M\}\} : \{A_1^{-1} \times A_1^{-1}\} &= \begin{pmatrix} 16 \times 4 & -12 \times 1 \\ -12 \times 1 & 9 \times 4 \end{pmatrix} \times \frac{1}{4} = \frac{85}{4} = b_{11} \\ \{\{M\}\} : \{A_1^{-1} \times A_2^{-1}\} &= \begin{pmatrix} -8 \times 4 & 4 \times 1 \\ 6 \times 1 & -3 \times 4 \end{pmatrix} \times \frac{1}{4} = -\frac{37}{4} = b_{21} \\ \{\{M\}\} : \{A_2^{-1} \times A_1^{-1}\} &= \begin{pmatrix} -8 \times 4 & 6 \times 1 \\ 4 \times 1 & -3 \times 4 \end{pmatrix} \times \frac{1}{4} = -\frac{37}{4} = b_{12} \\ \{\{M\}\} : \{A_2^{-1} \times A_2^{-1}\} &= \begin{pmatrix} 4 \times 4 & -2 \times 1 \\ -2 \times 1 & 1 \times 4 \end{pmatrix} \times \frac{1}{4} = \frac{17}{4} = b_{22} \end{aligned}$$

従つて $\{\{M\}\}$ を (20) 式の形で示せば

$$\begin{aligned} \{\{M\}\} &\equiv \frac{85}{4} \{A_1 \times A_1\} - \frac{37}{4} \{A_1 \times A_2\} - \frac{37}{4} \{A_2 \times A_1\} + \frac{17}{4} \{A_2 \times A_2\} \\ &\equiv \frac{85}{4} \begin{bmatrix} 1, & 2 \\ 2, & 4 \end{bmatrix} - \frac{37}{4} \begin{bmatrix} 3, & 4 \\ 6, & 8 \end{bmatrix} - \frac{37}{4} \begin{bmatrix} 3, & 6 \\ 4, & 8 \end{bmatrix} + \frac{17}{4} \begin{bmatrix} 9, & 12 \\ 12, & 16 \end{bmatrix} \equiv \begin{bmatrix} 4, & 1 \\ 1, & 5 \end{bmatrix} \end{aligned}$$

次に示す計算例は、アフィン変換によつて $b_{12} = b_{21} = 0$ となるように求めたものである。

$$\begin{aligned} A_1 &\equiv [1, -1], \quad A_1^{-1} \equiv [6/11, -5/11], \quad A_2 \equiv [5, 6] \\ A_2^{-1} &\equiv [1/11, 1/11] \quad b_{11} = 209/121, \quad b_{22} = 11/121 \\ \{\{M\}\} &\equiv \frac{209}{121} \begin{bmatrix} 1, & -1 \\ -1, & 1 \end{bmatrix} + \frac{11}{121} \begin{bmatrix} 25, & 30 \\ 30, & 36 \end{bmatrix} \equiv \begin{bmatrix} 4, & 1 \\ 1, & 5 \end{bmatrix} \end{aligned}$$

逆マトリックスは (25) 式によつて

$$\{\{M\}\} \equiv \frac{121}{209} \begin{bmatrix} 36, & -30 \\ -30, & 25 \end{bmatrix} \times \frac{1}{121} + \frac{121}{11} \begin{bmatrix} 1, & 1 \\ 1, & 1 \end{bmatrix} \times \frac{1}{121} \equiv \frac{1}{19} \begin{bmatrix} 5, & -1 \\ -1, & 4 \end{bmatrix}$$

2次のマトリックスは非常に簡単で、上記のようにアフィノールの形を与えるまでもなく逆マトリックスの数値を計算するのも容易である。演算の過程は次数が増加してもそれ程複雑とはならず、高次のマトリックスの逆を求める算出においては、慣用されている消去法に比べて演算の精度を少ない労力で上げることができる。

工学問題として提出されるマトリックスは、大抵の場合対称マトリックスである、非対称マトリックスも多くは対称マトリックスの形に帰結して計算することができる。次の機会に対称マトリックスの種々の重要な性質を述べ、合せて対称マトリックスの逆マトリックスの計算法を詳かにしたい。

参考文献その他

- 1) 伊藤徳之助：応用ベクトル解析
- 2) 例えば 藤原松三郎：行列及び行列式 藤原松三郎：代数学 森本清吾：数論 遠山啓：行列論
数学辞典（岩波） 応用数学便覧（丸善）
- 3) 転置行列を A^t と記すこともある。 A^* は複素ベクトルにおける共役転置行列を意味する。ここで取扱ふのは実数ベクトルであるので A^* の記号を使用した。
(昭.31.7.4)